

# 丘人 第二號

## 思想

### Tさんご和尚

葉分 日

南向きの座敷でTさんは和尚と對面してゐる。午後の日足は暑までは届かぬ。襟袵からすく池である。池には小波が立つてゐる。X  
 X庵と號するだけ邊りは静かである。  
 「座敷に泥足で上つたと思ひなさい。氣がついて慌てたら登は尙よこれる」和尚は池の面を見つめたまゝものをいふ。

「慌てずに何うしますか？」Tさんは和尚の顔に訊く。暫くは答がない。和尚の右手に持つ扇子がパチリと音を立てた。こちらを向いた和尚

「わしは煩惱のある人間が好きじや」といふ。煩惱の處置を聞きたいTさんには、この答は少し妙である。禪畑に生えたものはよく法問さかをするを聞いた。問答は相手あつてのことである。和尚の話には相手が無い。Tさんは、勢い自分を捨て、隨いて行かればならぬ。

「何故ですか」

「釋迦は煩惱の最多い男ぢやつた」と、釋迦と友達だつたやうなことをいふ。

「それで煩惱のある人間がお好きで——？」

「もうじやない。——あんたは西洋の學問をしてゐるから、キルヒマンといふ男を知つてよじやらう」

「いえ、知りません」元來Tさんは、西洋人の名を一向有り難がらぬ男である、従て知らない。

「キルヒマンは、心があつて威がある、さかいつたさうじやが、月や星を拜んでも威は覺えぬ。月や星は命令せぬ。北斗を仰いで無象の聲を聞く、それは譬へじやよ。さころで、命令を聞くは命令する心。喇、眞宗でも佛智を信するは佛智といふ。わしはそれを煩惱といふ。煩惱があればこそ自作出来る。無礙じや」。

Tさんは念佛を唱へる男である。和尚の話は俺の領分を侵してゐるやうな氣がするが、はつきりせぬ。

池の面に浮いてゐた水鳥が、音もなく忽ち水に潜つた。涼しい風が、着流した和尚の白衣の袖を拂つて、床の掛軸をカラ／＼と鳴した。掛軸に何が書いてあるか、今のTさんには氣の付く餘餘はない。

「煩惱は片付けたさいふで一大事を究明したやうな願するのには下根の野狐じや。星を見てゐるだけの話」

「はア」Tさんは初めて要領の悪い返答をした。

「したが、いづれば有も無も不可得。無なら

無と死に切るも一工夫じや。折角精進しなされ」和尚は冷えた茶を一口すつた。  
 「その死に切る工夫が承りたい」といひたかつたが、もう止めにした。

Tさんは歸りの電車の中で、あの和尚は俗物に違ひないと思つた。Tさんは丘人の一人である。(七月三日)

## 断片

A—爽竹桃の花の赤さはどうだ。  
 B—爽竹桃の花は七月の陽に燃え立つてゐる。

A—同じ事を云ふのに君の方が言葉が不經濟に使つてゐる。  
 B—君には詩が分らない、藝術が。  
 A—分らないでも飯がくへる。いや分らない方がよりよく飯が食へる。

## 筆のまゝに

登詩子

夜更の驛で下りに一時間も待たされた五十近い婆さんが重さうな包をかゝえて「上り」から降りて来た。もう人力車はない。さも困つた様に思案してゐた。私も老人の爲に同情した。若し私に尋ねてくれるなら人力車を探して来てやらうとさえ思つてゐた、ほんたうに氣の毒に思つてゐたのだから。  
 所が婆さん、一向私に尋ねないで知つた様な顔をして煙草をのみ始めた。  
 私は小面憎くさへなつた。……どうして斯う急に私の心が變つたらう、私は變に感じた。私はほんたうに同情してゐなかつたかも知れぬ。其時は眞に同情してゐた様にみえ

たのが未だ薄かつたかも知れぬ。

中學時代に排斥運動を起した先生が死んだあの頃の事をつくづく思ひ起す。悪い事だつた、人間は死に到達しなければ眞に相愛する事が出来ないのだらうか。同じ人類であり乍ら然も同じ日本人、同じ學校の先生と生徒との間柄であり乍ら如何に籠の中から放たれる事を欲したと云へ——あゝ惡かつた。

## 丘人を見て

山崎すゝむ

第一回の丘人を見た私は心から淋しい氣がした。貧弱なものと云ふよりは何んの感興も湧かぬつまらぬものと云ふ方が適してゐるかも知れない。  
 あれならむしろ部報でもした方が純然としてすが／＼しい。  
 思想なり研究なり趣味……さうした總ての人心から愛好されるものが欲しい。  
 あれだけ紙に餘裕があれば私は立派な丘人の出来ることを信じてゐる。  
 誰も部報なご心から讀むものでない。  
 もう少し舊來の婦りを捨て、清らかに人間性に迫みたい、新生味が欲しい。  
 一度實行してみてもらひたい。  
 學生一般に愛されるのが私等部員の念願であり同時に喜びではあるまいか。  
 それに取捨に關しても自由であつてほしい。どんな事でも大きな心で眺めて戴き度いと思ふ。

丘上雑話

○あのなじみ深い煙突が倒れ倒れ、白面の顔る長い奴がおつ立つてから随分久しくなる。長の年月に古く錆びた赤い煙突は「神戸高商にヤッコヤノヤ……」で丘の人達に忘れられないものだ。歴史はこうして巡るのだ。

○「ヤッコヤノヤ」で思ひ出すのは我が敬愛するパロット先生のことだ。遙かなるパロット先生よ。あなたに戴いた小さな聖書は未だに私のポケットにあります。先生よ。相變らず赤い日傘をさしていらつしやいますか。

○先生の後衛。あの商研のコートで時々勇ましい姿を見受ける。一つ負けるぞ「よし今度だ」とおつしやる。又一つ敵にゆづつて「これからだ」とおつしやる。そうしてゐる中にゲームセットが速やかに来る。

○去る日の朝、六甲停留所附近の踏切で、折柄疾走して来た電車のあなりで、買ひ立ての「カンカラ帽を真二つにしてやられた男がある。前車の轍るは後車の戒めになる。各々注意が肝心であるぞよ。

○色の黒いこゝ。色の黒い人達の名前を思ひ起す前に當然黒がるべくして然らざることを不思議さが先づ腦裡に浮ぶ。野球部のN君など。

○然り而して、こゝを以て案ずるに、黒色を纏じて白面ならしむるこゝのあらゆる人為的手段の不可能なることは論理の當然なりと云はざるべからず。

痛められ行く

すゝむ

我れの淋しみは生きつゝある人の姿果てしなくも歩み果てしなくも眠る人の國この國！  
人あまた住めども共に遠き彼が夢  
幻の國 人への嘲り 現の國 唯人之に嘲ぐ

大地に眠る人の世の吐息 今は感ぜず  
小草に香る人の世のリズム今は知らず  
凄じき焰のみ 彼が血に慣く  
憎みを言ひ 實にあせり 我れに溺れ  
静観する人生の時しばらくもあらず  
眠りの中に争ひ 夢が中に罵る  
心!!

人なく 神なく 愛は冷たき骸となる  
嗚呼やむなし  
土煙る灰色の流れを只管らに泳ぐ人の子なれば  
されど悲し あまりに悲し  
水草が呼吸にも浮沈の生命あるものを  
さよやかなる小島がが弱き腰帯にも  
涙の調 踊るものを  
美しの人 醜き人 人の世の人  
煙りの底に喘ぎて凄じき微笑にしばし人生を休む

月見ても月にあらず星見ても星にあらず  
涙は醜き戦の汗にして 汚れたる魂をな  
り あゝ悲し  
嬰兒の微笑も處女が瞳も共に荒れにし  
人間の國なりけり  
淋し 淋し  
空き香りはうすらぎ 戀は冷え  
熱なく 聖なく 涙なし  
燃ゆる思ひは唯 我が姿なり  
我れそ胸に手をあてれば  
愛の雷 微笑む國 無きかこ高鳴る

あゝ淋し

病み疲れし魂の戯れよ  
その戯 いさつらきこゝなり おう!!  
我が胸に宿る乙女の國  
君が胸にも濡れる雷あり  
其身の汚らひしきを言ふにあらす  
其魂のつたなき誓いを言ふなり  
おう輝ける處女の國よ  
その身唯一にてあれ  
高らかに己れが人生歌を告ぐるより  
涙の中に淋しみの心もて己れが聖き果ぞ淨めかし 祈れかし

あゝ我れ知らずく戀をおぼえぬ  
幻想の吐息 無限がせよらぎ  
聖き眞向の現はれのみ  
百合の姿にて赤き心  
清く美しく澄みはゆる曲線の流れ  
天女が心して 唇は燃え  
歩みも 吐息も 高鳴りも  
ふくよかなる彼女が熱帯の戦き  
捧ぐる神祕 その身 その心  
おう腹は求めんとする生命にてあれ  
涙はそのほざけしりにてあれ  
嗚呼人の世の淺ましき國に  
淋しみの熱愛を奏でる涙の子お前よ  
泣け 泣け 泣け……  
泣いて求めよ……

(一九二二・一二・二三)

短歌

としゆき

乾きゆく涙の別襟に腰居して鳥近くゆく軌  
影響みき  
右の家左の家の軒端より流るに似たり風鈴  
の音  
そよ風に洗ひし髪を梳らしつ君は柱に背屋  
の中に

砂上風情

○鎌倉では燕が歸へつて来て皆バラックに聚うてゐるさういふ。蕭條たる色里の光塵には今更ら驚愕さ哀情の泪を禁じ得ないものがあらう。

○控所の掲示に「試合は目眩に迫りあり二句に亘る合宿の悲痛や如何ばかりなりし川正義に進む吾に二臂の力を與へらむことを」さあつて全文赤いまるに曇るしうつきまこはれてゐる。一臂の力を要求してゐるまこらうたた焼眉の息を思はせるものがある。蝦眉秀麗なシヤンが來たら素敵だ。(沈黙)

○九十度の酷暑は氷の部屋に居ても暑さを感ずるだらう。控室でウドンを食つてゐる聖者のお顔はさながら金時が一杯きこしめした體だ。かゝる日にウドンを食はしむる事情は互に泣かしむに足る。

○月の始めださ云ふのに清風堂のおつさんが控室に頑張つてゐる。「君子堂俗塵を好まんや」てなことを云つて縁座にいさも涼しげなお顔を並べてゐる諸君子よ「携ひ給へ清風堂の菓子金を」か。

○荷臺に年経てすめる寢物あり。勇者出てそな退治する時は暑中休眠なるものを物段に仕舞ひ込んでよろしい。黒いキヤツプをかぶり青磁色の着物を着た一見柔和なお嬢さんである。——睡魔——(檀古堂主人)

○登校の際あの長い坂を犬のやうに息を切らして上つて来た時芝蘭正面の時計が何時も何時も十二時では履る空腹の感に堪へぬ。なる程芝蘭内には音楽入の標準時計なるものがあるけれども先づ眼に入るものはどうして正面の時計ならざるを得ぬ。最も早い時機に動かして欲しい。(檀古堂追記)

### 鐵道乘車割引證其 の他に關する注意

夏期休暇中に於ける鐵道乘車割引證の使用  
方其他に關し七月七日學生課より各組々長を  
通し學生一般に對して注意する所ありたり。  
念のために之を採録す。

一、鐵道乘車割引證に關する件  
夏期休暇に入り各自旅行の爲め鐵道乘車割引  
證を使用する場合も多々可有之被察候處言ふ  
迄もなく該割引證は學校より交付を受けたる  
本人以外の使用或は割引證に依り購求したる  
に乘車券を他人に譲渡する等のことは禁ぜら  
れ居候萬一本校學生々徒中に右等不正行使者  
を出す様のことありては遺憾に付各自駕と注  
意のこと

二、阪急電鐵定期券不正行使の件  
阪急電鐵當局の言ふ處に依れば同電鐵に依る  
通學者にして定期乘車券の不正行使を發見せ  
らるゝもの間々有之越本校學生中にはさる不  
心得の者なかるべしと信するも此際一段の自  
重を忍む

三、鐵道事故に關する件  
近時遊戯的に列車に投石し軌道上に障礙物を  
放置する等の鐵道事故頻發し又列車内及停車  
場に於て公衆道徳を無視するが如き行動に出  
ざるもの影からざる趣を以て之等事故防止に  
就きて援助を乞ふ旨鐵道次官より通牒の次第  
も有之候に就ては高等教育を受けつゝある本  
校學生生徒中に右様の行動を敢へてする者有  
之べしと思惟されず候も此際特に右に留意  
すると共に萬一他人が右様の行爲をなしつゝ  
あるを發見したる場合は懇切に之を説きて改  
めしむる等公徳の涵養に資するの信念を持さ  
れたること

### 學校日誌

- 五月二十日 在外研究員教授花月龍藏大正十三年五月十五日在留滿洲の處同年九月十五日迄私設滞在の件許可せらる
- 五月二十五日 助教授多田徳雄に東京市へ出張を命ず
- 五月二十五日 水島校長實業專門學校長會議出席の爲め上京す
- 五月二十九日 書記合田熊平に大阪市へ出張を命ず
- 六月四日 教授小久保定之助、坂西由藏各々勳四等に叙し瑞寶章を授けらる(五月三十一日)
- 六月四日 甲賀常雄にマイアライター授與を命ず
- 六月八日 水島校長上京中の處本日離任
- 六月十四日 午後一時より教授會開會
- 六月十八日 教授田崎徳治、小久保定之助、坂西由藏、石橋五郎、原口亮平、瀧谷春一、齋藤常三郎に各々臨時本校規則改正調査委員を宛託す
- 六月十九日 柔道師範村治清治郎に京都市へ出張を命ず
- 六月十九日 使學の爲め本年夏期休業中左記本科第三年生十六名に海外旅行を命ず
- 佛領印度支那
  - 高井 修一 伊藤 幸一 松浦 桑
- 北部支那
  - 大山 恭三 山本 實 水谷 安平
  - 井上 富雄 森村順一郎
- 中部支那
  - 屋山 正一 佐々木彌一 久保田太三郎
- 繁榮統治部
  - 伊達 謙郎
- 南部支那及臺灣
  - 富川 謙一
- 朝鮮滿洲
  - 佐久間敏雄 湯口 賢治
- 六月二十三日 教授小川忠藏、丸谷喜市、須藤文吉、渡邊徳松に各々臨時本校規則改正調査委員を宛託す
- 六月二十五日 左の通り官等階級せらる
- 高等官三等(六月二十一日)教授日野 貞禮
- 高等官五等(同) 教授佐々木圓梁

### 圖書館新着和漢書

- 大正十三年五月三日
- 書名 著者名 番號
  - 廣告論叢第一、二輯 萬年社編 一〇三〇
  - 獨逸戰後の財政と金融 高城勉次郎著 一〇三〇
  - 銀行論 青木 得三者 一〇三〇
  - 震災と金融 藤本ビロアローカー銀行編 一〇三〇
  - 北滿洲と東支鐵道(下巻) 滿 鐵編 一〇三〇
  - 海運概況 大正十一年度 逓信省船舶局編 一〇三〇
  - 社會保險研究 森 莊三郎著 一〇三〇
  - 海外有價證券市場論 第一卷伯林 向井 鹿松著 一〇三〇
  - 勸定各論講義 中村 茂男著 一〇三〇
  - 第二回近世商業簿記 吉田 眞三著 一〇三〇
  - 滿蒙全書 第六卷、第七卷 滿 鐵編 一〇三〇
  - 滿洲の産業 臺灣總督府編 一〇三〇
  - 神戸港と生絲貿易 神戸商業會議所編 一〇三〇
  - 船乗りが覗いた南米伯利西蘭 川村 輝三者 一〇三〇
  - スタチスト誌の見たる日本の經濟状態 松方幸次郎著 一〇三〇
  - 歐米各國に於ける商工業振作施設一斑 二一三九
  - 滿洲大豆と日本の農村 淺野 謙吉著 二一四〇
  - 關東東印度に於ける椰子の栽培 臺灣總督府編 二一四〇
  - 獨逸英に於ける商工業者に關する特別裁判法制 司法省編 二一四〇
  - 獨逸國少年裁判所法 同 同
  - 司法制度改良論 同 同
  - 獨逸新經濟法 同 同
  - 補批判的法律哲學の研究 恒藤恭著 二一四〇
  - 親族相続法綱領 上巻 遠藤登喜次著 二一四〇
  - 訂日本債權法各論 上巻 鳩山秀夫著 二一四〇
  - 商法總論 上巻 高窪喜八郎著 二一四〇
  - 會社法 上巻 松本 添治著 二一四〇
  - 海商法通論 庄田 正一著 二一四〇
  - 破産法研究 第五卷 加藤 正治著 二一四〇
  - 破産法原論 下巻 竹野竹三郎著 二一四〇
  - 民事訴訟法論 早川彌三郎著 二一四〇
  - 破産法講義 竹野竹三郎著 二一四〇
  - 新刑事訴訟法大意 平沼昭一郎著 二一四〇
  - 刑事訴訟法講義 上巻 小野清一郎著 二一四〇
  - 司法警察論 高井 賢三者 二一四〇
  - 羅馬法に於ける慣習法の歴史及理論 加藤 恭著 二一四〇
  - 保險法令輯覽 農商務省編 二一四〇
  - 大論増刊 新法令(第四十六回) 二一四〇
  - 時局問題批判 朝日新聞社編 二一四〇
  - 比例代表の話 江木 翼著 二一四〇
  - 支那現代史 松井 等著 二一四〇
  - 朝鮮統治論 青柳 南冥著 二一四〇
  - 外務省公報集 第四輯(大正十二年) 二一四〇
  - 新憲給法講義 國具 陸三者 二一四〇
  - 行政法概要 各論上、下 美濃部達吉著 二一四〇
  - 商業研究所講義集第二輯 二一四〇
  - 獨逸の賠償能力 二一四〇



復興叢書 第二、三輯 上田貞次郎著 五、九一  
 商業經濟論叢  
 名古屋高等商業學校編  
 マダモ 歴史社會國家學説 上  
 クラス 河野 密譯 五五  
 經濟學の實際智識 高橋 勉吉著 五二〇  
 マルサン人口論 鈴木 正孝譯 二二  
 地代論 高島素之等譯 二二  
 財界は何うなるか 勝田 貞次著 五二五  
 科學的研究した執務能率増進法  
 神長倉眞民著 五二五  
 ゴータ綱領批判 水谷長三郎譯 四〇  
 新労働黨の實際的綱領 白川威海著 四〇  
 文明の没落 室伏 高信著 四〇  
 近世社會思想史 波多野 鼎著 四〇  
 婦人問題評論集 帆足利一著者 四〇  
 社會進化と婦人の地位 山川菊次譯 四二  
 關領東印度諸島人種分布圖  
 幸澤總督府編 四二  
 徳川幕府の米原調節 本庄榮治郎著 五五  
 日本社會史 同 七  
 農民經濟史研究 小野 武夫著 七  
 補民地統治論 泉 哲著 五七  
 伯刺四爾國サンパウロ州移民法 外務省編 一〇  
 歴史の理論及方法 植村清之助共譯 六二  
 安藤 俊雄 後編 六二  
 神聖羅馬帝國 古部百太郎譯 六三  
 神代史の研究 津田左右吉著 六三  
 新日本讀史地圖 吉田 東伍著 六八  
 日本國民思想史講話 石田文四郎著 六九  
 猶太人の世界政略運動 酒井勝軍著 六九  
 史的研究天災と對策 本庄榮治郎著 六九  
 李朝史大全 青柳 南冥著 六九  
 青山餘影 熊澤 一衛著 六九

露領沿海地方及接壤地方圖 鐵編 七五  
 大正十三年曆 東京天文書編 九一  
 六線對數表 田中 矢德編 九一  
 文學原論 高橋 頑二譯 一〇一  
 近代劇大系 第七卷獨塊篇 二〇一  
 同 第九卷 英及愛蘭卷 二〇一  
 社會改造の哲學 藤井 章譯 二〇一  
 ゲエテ 小田 秀人譯 二〇一  
 現代思潮の基礎 高橋 頑二譯 二〇一  
 哲學原論 松原 寛譯 二〇一  
 バイドゥン 菊地慈一郎譯 二〇一  
 カント研究 大關増次郎著 二〇一  
 グントの民族心理學 桑田 芳蔵譯 二〇一  
 社會と意思 二〇一  
 續詳書類從 第三輯上 第十四輯下 二〇一  
 第十五輯上、下 二〇一  
 商業大辭書 索引及第一卷 二〇一  
 統計學概論 森 數樹著 二〇一  
 日本帝國統計年鑑 第四十二回 統計 局編 二〇一  
 時事年鑑 大正十三年 時事新報社編 二〇一  
 北支那貿易年報 大正十一年上編 二〇一  
 第四十六回帝國議會衆議院議事摘要 上下 二〇一  
 大阪大林區選統計書 大正十年度 第二編 二〇一  
 國有林從業林業勞動者調 大正十一年度 二〇一  
 青森大林區選統計書 二〇一  
 釜山港經濟概覽 大正十一年度 二〇一  
 橫濱外國貿易年報 大正十一年度 二〇一  
 橫濱 稅關編 二〇一  
 海外旅行調查報告 大正十二年 神戶 高商編 二〇一  
 滿洲に於ける硝子工業 滿 鐵編 二〇一  
 我國に於ける木材の需給と滿洲材 同 二〇一  
 小麥及麥粉の需給上より見たる日本と滿洲 同 二〇一

### 部報

#### 野球部

盛夏七月、人は皆冷風のみを追ふ時に、吾々は流汗淋漓落陽を嘆んじつゝ苦練を積む。將に京洛の地に風雷動き旌旗靡らんとして居る、時は我々の安閑たるを許さない、全國爭覇戦は遂に目睫の間に迫つて来た。  
 吾等の好敵手は先づ京阪神に在る、關西、三高、醫大又一方の鼻雄たるを失はない、更に一高、二高、長崎高商等編を稱へんとするも、この鏖戦を率いて我が牙城に内迫せんとするのである。  
 吾々の名を成すの時、此の機を逸して又何の時にか是を求めんとするか。  
 吾々は此の十餘日を鳴尾に合宿して最後の猛練習を試みんとするのである。  
 熱血の士よ、吾々の爲に、吾々の爲に、絶大の聲援を與へよ。

最近吾部の状態下の通り。  
 六月二十一日杉村倉庫と杉村グラウンドにて戦ひ接戦十三合にして決せず日没の爲無勝負となる。  
 記録の大略左の如し

打數	四十
安打	三
得點	五
三振	十五
四球	十一
失策	三
杉	489379126
山栗	489379126
村崎	489379126
田田	489379126
田田	489379126
津澤	489379126
井井	489379126
本	7426183599
本	7426183599
本	7426183599
本	7426183599
審判	高須、内海

同二十四日寶塚にて協會軍と戦ひ二對零の接戦にて敗れる。

#### 水泳部

愈々河島奮闘の時期到来である。年來の宿願であつたプールも完成して渾々たる勢水が満々こぼれたので、先づ手始めとして神戸高工との練習試合を六月十六日午後一時から舉行した。當日は中村、大島兩關將の出場を見なかつたが次の如き成績を以て大勝した。

一、五十米自由型(高工三點、本校三點)	一着 吉田 (高工) 三一秒八
二着 淺野 (本校) 三五秒四	三着 小山田 (本校) 三六秒四
二、百米背泳(高工三點、本校三點)	一着 小林 (高工) 一分五二秒四
二着 作田 (本校) 一分五七秒六	三着 津澤 (本校) 二分一秒二
三、四百米自由型(高工一點、本校五點)	一着 松村 (本校) 七分四秒六
二着 作田 (本校) 七分一八秒八	三着 小林 (高工) 八分三二秒
四、百米自由型(高工一點、本校五點)	一着 淺野 (本校) 一分二二秒二
二着 松村 (本校) 一分二三秒四	

塚 玉山本 手賀岡崎	打數	三十三
兒原山清 大井片尾	安打	五
534196827	得點	三
	三振	一五
	四球	一一
	失策	三
校 尾戸岡村江村原島島口	打數	三十
藤寺平木安四高光川楯	安打	三
7492612358	得點	〇
	三振	〇
	四球	四
	失策	三
審判 松本、河合	失策	三

- 三着 吉田 (高工) 一分二五秒
- 五、二百米平泳(本校五點、高工一點)
- 一着 井 關 (本校) 三分二七秒
- 二着 三 輪 (本校) 三分三八秒八
- 三着 吉田 (高工) 三分四七秒
- 六、二百米リレー(本校三點、高工零)
- 一着 本校(鈴木、淺野、松村、作田) 二分二七秒
- 二着 高工(吉田、小早川、鴛田、橋場) 二分二六秒
- 七、アラシヤ(本校五點、高工一點)
- 一着 三 輪 (本校) 四八呎六吋
- 二着 鈴 木 (本校) 四六呎六吋半
- 三着 巽 (高工) 三三呎
- 本校二九點高工一〇點

プール開き競泳大会は六月二十二日花々しく舉行された。空梅雨の天候が生憎當日に俄雨となつたが、プールの四圍は觀衆で人山を築くの盛況。午前十時から、本校選手午後一時から關西専門學校及び中等學校競泳大会を催した、専門、中等學校決勝記録次の通り。

- 三着 小山 (天蘭)
- 五、百米背泳
- 一着 木 村 (同志社中) 一分二四秒八
- 二着 黒 山 (茨木中)
- 三着 新 井 (同志社中)
- 六、二百米リレー(専門學校)
- 一着 大阪高蘭 二分一八秒二
- 六月二十八日、御影セント・ジョセフ軍の挑戦に應じて、午後三時より本校プールに於て、第二メモバーを以て對戦す。
- 二十九點對十六點の差を以て快勝せり。
- 一、五十米自由型(本校三、七軍三)
- 一着 中 村 三三秒八
- 二着 Kawagoe.
- 三着 A. Dresser.
- 二、百米自由型(本校五、七軍一)
- 一着 淺 野 一分二〇秒四
- 二着 中 村
- 三着 Kawagoe.
- 三、百米平泳(本校三、七軍三)
- 一着 高 田 一分四〇秒八
- 二着 A. Dresser.
- 三着 S. Dresser.
- 四、二百米自由型(本校三、七軍三)
- 一着 作 田 三分二二秒八
- 二着 L. Cox.
- 三着 L. Heavy.
- 五、四百米自由型(本校五、七軍一)
- 一着 松 村 七分九秒四
- 二着 淺 野
- 三着 L. Cox.
- 六、アラシヤ(本校六、七軍零)
- 一着 鈴 木 一五米七
- 二着 三 輪
- 三着 中 村
- 七、五十米背泳(本校四七軍二)

- 一着 中 村 四五秒
- 二着 Kawagoe.
- 三着 鶴 澤
- 八、百米リレー(本校零、七軍三)
- 一着 セント・ジョセフ
- 二着 本校(富川、松村、井關、三輪)

對大阪高蘭戦は来る七月六日舉行される。本年を以て第五回を數へてゐるが、第一回は我軍の大勝に歸し、第二回、第三回は僅々一點乃至二點の差で敗戦の苦をなめてゐる、第四回即昨年には彼到底勝算なしと見て昨秋大震災をよき口實として吾を避けた。かく卑怯なる彼を相手とするを好まぬい吾部も某有力者の斡旋により再起して彼を粉砕せんとしてゐる。二句に亘る合宿の悲哀それは言ふ迄もない。併し吾には簡登健兒の意氣がある。是非勝たねばならぬ。いやきつと勝つてみせる。諸君の熱誠なる御支援を望みつゝ筆を擱く。

對三高戦記  
 去年の春おそくも敗れ、再び相見えんとして、雪辱の意氣に燃ゆる三十のフスリートは平岡雄雄氏コーチの下に、初夏の陽を浴びて一走一投に専心技を練りぬ。試練の日六月十五日は来れり。寝屋川原頭に進め輪贏を決す。

今靜かに戦勝の日を顧みて、その苦闘と歡喜との跡を忍ばんに。

- 一、忠田(三高)
- 二、馬場(三高)
- 三、山本(本校)
- 二百米 二三秒六
- 一、山本(本校)
- 二、忠田(三高)
- 三、馬場(三高)
- 百米の山本二百米の屈山の敗は心惜し。
- 四百米 五六秒
- 一、屈山(本校)
- 二、馬場(三高)
- 三、天野(本校)
- 我脅威なりし馬場スマート好かりしも、屈山のラストの頑張り奏功す。
- 八百米 一分一三秒八
- 一、山下(本校)
- 二、平野(本校)
- 三、上林(三高)
- 千五百米 四分三四秒六
- 一、山下(本校)
- 二、上林(三高)
- 三、平野(本校)
- 五千米 一九分〇八秒
- 一、平内(本校)
- 二、山下(本校)
- 三、齋藤(三高)
- 中長距離を通じ、山下(陸)の奮戦目覚しく、平野、平内又奮戦して勝因を造れり。
- 低障礙 二八秒二
- 一、星名(三高)
- 二、今里(本校)
- 三、關寺(本校)
- 高障礙 一七秒八
- 一、今里(本校)
- 二、加藤(三高)
- 三、木村(三高)
- 今里は低障礙に百初の功を一袋に缺きし體ありしも、高障礙は餘裕裕々として勝つ。
- 走幅跳 五米九一
- 一、星名(三高)
- 二、今里(本校)
- 三、關寺(本校)
- 走高跳 一米六〇五A
- 一、神山(三高)
- 二、今里(本校)
- 三、加藤、木村(三高)
- ホ、ス、ヤチャン

一、星名(三高) 二、今里(本校)  
三、加藤(三高)  
星名行くとして可ならざる無く、走幅跳は  
死に角後二者に勝つべかりし今里惜しくも二  
等にて止む。

棒高跳 二米六六  
一、加 (本校) 二、佐々木(本校)  
三、山下(本校)  
異外際科三士全勝す。

回盤投 二八米六七五  
一、西川(本校) 二、難波(本校)  
三、神山(三高)  
砲丸投 一米八〇  
一、星名(三高) 二、白井(本校)  
三、難波(本校)

槍投 四七米二〇  
一、神山(三高) 二、山本(三高)  
三、伊吹(本校)  
八百米リレー 一分三六秒六  
一、本校(山本、竹内、園寺、屋山)二、  
三高

朝来の短距離の結果に徴し、将亦敵三高の  
自身に依るしレーは危まれしが、トップ山  
本敢然忠田を仰へ更に引離し、竹内、園寺の  
好タツチに依り差を加へ、屋山裕々勝つ。  
千六百米リレー 三分五〇秒二  
一、本校(山本、今里、天野屋山)二三三高  
山本又も忠田を仰へしが、忠田ハトン落  
し、三高の力走も効なく、斯くて皆大勝に歸  
す。  
此日山家西川の二超野毅病みたりと云へ、  
得點の四割を占めし際科選手の奮闘目覺しく  
將來勵望をたえす。

高 5 3 2 1 2 1 3 3 0 0 8 4 0 4 1 8 5  
本 1 3 4 5 4 5 3 3 3 3 3 2 6 2 5 3 1  
米米米米米米米米一ノ跳跳跳ア投投投  
百 百  
百百百 千障障リ編高高ヤ盤丸  
百百百 哩哩 ス ス  
百二四八千五低高半一走走棒ホ回砲槍  
(白虹子)

**相撲部**

梅雨に遁入つても一向雨を見ず蒸暑い盛り  
だつた六月の二十三、四、五の三日間に亘つ  
て本年度對級相撲大會が行はれた。  
初日は本二對本一で實力伯仲して居つたが  
結局三回戦を通じて十五對十二で本二が勝つ  
たのは蓋し年の功か。  
二日目は本三對豫科だつたが豫科が己むを  
得ざる事情で奮闘したのは惜しかつた。三日  
目は愈々本三對本二の優勝戦力全く伯仲し  
一進一退、最初は四對五で本二勝ち次は五對  
四で本三勝ち更に第三回戦も本三、五對本二、  
四で通計十四對十三と云ふ際どい處で本三の  
勝になつたのは見る者をして熱狂せしめた。  
最後に飛付五人技は双方四十八手の裏表以外  
の秘術を出して渡り合つての大混戦を演じた  
が結局本二の堤が五人抜いて目出たく千秋樂  
向メジャー次の如し。

本二 本一 本三 本二

松本	矢頭	品川	松本
岡崎	木田	白岡	岡崎
藤野	瀨口	鈴木	藤野
土岐	田中	天野	土岐
坪川	西岡	宮崎	坪川
福本	中村	森井	佐川
佐川	岩井	財満	福本
横田	大原	光岡	福本
堀橋	水原	平岡	福本

**語學部**

我語學部員協力一致本學年の頭初より沈痛  
した種年の製價を嗜すべく専心努力の結果速  
日會議室に陣取つて英語社交會の例會を盛に  
して寸時も休むなき奮闘を示してゐる。語  
學小會も夏季休暇以前回の重なること既に三  
度及びおこは蓋し本校閉校以來レコード破り  
と思ふ。殊に第一回も第二回も二日に亘つて  
開催しなければならぬ程であるとは如何に會  
員こそつて自熱の緊張と必死の努力とを不斷  
に捧げてゐるかを推して餘あるを倍する。併  
し吾人は之に甘んぜず愈々勉め今秋には又大  
活動を開始する考である。部員かくの如し願  
くは諸君我が部の爲め一臂の力を致されむこ  
そな。

本年度第三回語學小會(七月二日)  
プログラム  
一、開會の辭 司會者 本二 瀨良 直世君  
二、廣告 藤二 竹村 一雄君  
三、如何に朝下の難局を解決すべきか 藤二 花田 武君  
四、アメリカに於ける K.K.K. 藤一 河合 源良君  
五、馬の巢 本一 眞原 壽一君  
六、大我の哲學 本二 傍島 省三君  
七、過去と未來 本三 高田 傳君  
八、閉會の辭 鈴木 教授

**蹴球部**  
對英船モリア蹴球戦  
六月十日、三對一勝  
前半戦 戦は敵のキツクオアに初まつたが  
超ちに我ハーフは球を奪ひて前衛に送る。小

橋大賢巧妙なる連絡にて進めば平山中央より  
猛烈に敵陣を襲ひ中谷亦右翼より敵を脅かし  
しが背惜しき所にゴールキックなる。敵  
も厲々攻め来りしが我中衛後衛の守備堅くし  
て接げず平野田村ロイルド敵のウイソクを  
防ぎ止むれば三上中央に多くの敵を引受けて  
戦ひ前衛を援け。我前衛敵の防備を破りて深  
く其の牙管に迫る光岡、中谷相援けつし巧み  
に進みて絶好のパスを中央に送り小橋得意の  
輕敵に美事な一點を得我應援團に歡聲揚る。

一點を先取せられて奮然とした敵は非常な勢  
にて攻めて来たが我防禦軍の水も漏らさぬ守  
備に如何にも得せず。後衛の豊田、齋藤、  
大飛を以て寄せ来る敵を一蹴す。平山、光岡  
等も絶好のチャンスを得たが遂に點を成す  
を得ず。

後半戦 相戦らす我軍は敵を壓迫し續けて  
居が突然敵の右翼ロソクを左翼に送れば  
彼其の踏足を利して我ゴールを襲ひ豊田防ぎ  
努めたるも及ばず美事なシュートにて一點を  
報ひらる。同點となり奮起した我軍は敵の非  
紳士的行爲に對する憤慨も加はけて物凄き攻  
撃を開始し幾何もなくして大賢のパスを光岡  
へツテンクとして球を中央に送れば快漢平山得  
たりとシュートし敵のキーパー手を出したが  
及ばずゴールインして一點を加へ再び勝越す  
敵の亂暴な行爲に益々憤慨した我軍は全く敵  
を封じ込み中衛の援けに前衛は敵のゴール前  
に肉薄し美事な連撃と妙技に觀衆を唸らせて  
居たが中衛、三上深く進みてシュートし更に  
一點を加ふ。其の後も我軍は敵を壓倒し攻撃  
を重ねる内にタイムアップは宜せられた當日  
奮闘の選手左の如し。

- 村田 藤村 上野 各岡山山捕夏  
中 齋藤 三平 中 光平 小大  
GFHWHWIFIW  
GLRLRCLRRL



登山部

第九回例会 再度より摩耶(六月二十二日) 諏訪山—二本松—再度山—願ヶ原 (藤本九三氏の摩耶登山の講話を聞く) 市ヶ原—天狗道—摩耶山、解散、参加者十名。

第十回例会 蘆屋より奥池、中畑へ 六月二十九日 蘆屋川停留所—辨天岩—中畑、奥池—大飯—寒天小屋—苦楽園—岩ヶ平—蘆屋川、参加者八名。 第十一回例会 東六甲の梓仁川峡谷 七月六日 風川停留所—上ヶ原浄水場—仁川峡谷—深谷池—逆瀬川—阪急逆瀬川停留所。

第十一回山岳講演會

七月三日(木)午後七時より新講堂にて第十一回山岳講演會を催した。「日本アルプスの登嶺旅行」なる演題の下に大阪朝日神戸支局長藤本九三氏の講演があつた。同氏は麓に冬の上ノ岳を極められ今又雪の北アルプスを縦走せられた山岳家で、其豊富なる経験より或は雪渓に或は雪崩に又或は岩登り等いろいろ山のこゝろについて御話があつた。講演の後で反射幻灯と活動寫真があつたが活動寫真は殊に鮮明であつて高山の頂に身を置いているやうな気がした。(鈍生)

弓術部

五月二十五日 営部主催春季弓術大會を舉行。参加者二十六名。大島教士の禮射に始まる。當日成績次の如し。

- 尺二遠的 計
- 一等 六 七 一三 柴野(天商)
- 二等 七 六 一三 山口(本校)

三等 五 七 二 舟木(大醫康)  
 四等 六 五 一 潮崎(本校)  
 五等 六 四 一 深町(本校)  
 六等 七 二 九 平山(本校)  
 七等 五 四 九 京極(大商會)  
 八等 三 五 八 竹内(兵庫支部)  
 九等 六 二 八 高島(俱樂部)  
 十等 三 五 八 谷口(同大)

小久保部長賞品の授與せられ挨拶あり。閉會後部長及先輩兒玉高島(簡齋俱樂部)氏を部員に加へ三組に分ちて射會を行ふ。よいところを見せて昔をしのびせる。

對早大試合

六月一日 持矢二十、各部八名の中數 早大 九九 本校 九〇 午前からは始めて三十射の確定で手具懸引いて待つてゐたに通知の行違ひで午後からさいふこゝになつた。これで先づ出足を一歩くらかれた形、退風な程取り戻して強引で面倒な矢をどうにかして中てられること、これで二歩をひかへさせられた。唯三步の頑張り足らなかつたことが恐ろしい。(豊村生)

對大阪商定期戦

六月八日 持矢三十、各十名の中數 大商會 一一一 本校 一四六 差三五にて勝つ。

對大阪醫大豫科試合

六月二十一日(土) 持矢二十、各五名の中數 大高深 五八 本校 六五 差七 勝

ウァーレール

全日本ウァーレール選手権大會

去る四月二十八日全日本ウァーレール選手権大會關西區選に優勝せる我がチームは爾來猛烈なる練習を續け、五月二十三日夜行列車にて全日本選手権を獲得するべく東上した。二十五日學習院コートにて關東代表たる横濱基督教青年會チームと戦ひ、下記の如くストレットにて勝ち燦たる優勝旗は再び我が手に歸したのである。

山 中	三宅	相谷
前 清 原	中 矢 頭	後 田 中
衛 白 河	衛 畑 中	衛 乾 田
木 村	稻 葉	丹 波
		柳 澤

スコア(五回ゲーム)

- 第一セット 二十一對一
- 第二セット 二十一對四
- 第三セット 二十一對十

修養團事業報告

新團員歓迎會 四月二十八日午後三時半 於學生會館 小久保、岡田二先生の御出席を得、本年度の我々の態度に付意見を交換す。新入團員十名を得たり。數會五時半 第一回例会 五月五日午後半 於英選教室 社會見學、登山、討論會に就きて夫々相

當者より報告する所あり。

第二回例会

五月二十二日 英選教室 我が團の事務を一人にて處理されし木二三輪君病氣を以て一同連名にて見舞狀を出す。

討論會

五月二十三日午後三時—五時 於教授食堂 論題「學業・團學協調が」 早大教授武田四郎氏講演

六月二十日正午 於大講堂

演題「アジア文化の特色」 武田氏は印度哲學の大家なり、首々右手に珠數をかけつゝ我がアジアに懷然たる文化の存するを説かれ、米の排日問題に及び、汎アジア聯盟を提唱せる。

講演部の金曜講演と重なりたるを以て、講演部の同意を得て、講演部と本團との共催の金曜講演とす。

第一回登山

六月十五日、阪急六甲驛集合 六甲より前社に至り地獄谷を下り唐戸に出で更に摩耶に上る。登山部と共催なり。

第一回社會見學

五月二十四日 海洋氣象臺

第二回社會見學

参加者確定數三十名を越ゆる事五名 六月二十一日 大阪毎日新聞社

### エッセイのすゝめ

除白が出来たので、こゝにエッセイを  
諸君に何回もかゝ繰返してすゝめる。

暑中休暇は約二月の間に亘る。若し諸君が  
書店を訪れ、一冊のエッセイ入門書と辭  
書とを購ひ、エッセイの研究を初められ、  
一日一時間づつ at the Desk 三十日位続けら  
れたならば、諸君は九月再び學校に顔を出す  
時、相當會話も出来、讀書力も出来てゐる諸  
君を見出すであらう。我等神戸高商エッセイ  
協会の一員たるもの諸君がエッセイを  
習得して來られる時喜んで迎へ喜んで會話  
を共にするであらう。

如何にもエッセイは國際補助語である  
からして、習得容易である。だから人は必要  
な時が來れば暇を偷んで勉強するだらうとい  
ふ。がこれは無理な言分である。暑中休暇の  
如き好期を利用して諸君がエッセイを覺  
へエッセイを通じて文學の他の一面即ち  
エッセイ文學を知り、又これを通じて世界  
の現状をより理解し、深い人類愛に徹する時  
を、より早く來すことは他では得られ得ぬ幸  
福な諸君自身の上により豊富に満すであら  
う。

埋草として「ナツコヨヤ節」のある歌のエス  
セイラント譯をお目にかける。

Reverite de via domo, Irante  
tra la piano, Chu Roso de  
la pino, Chu mia larmos?  
Chu mia larmo? (源二郎)

### 編纂餘言

○近頃の暑さはどうだ、炎熱焼くが如きも、  
身は釜中にあるが如きも、何とていふか

よい。この暑さは誰が何といつたつて九十何  
度もあるんだ。ぢつとしてゐるさ肉が煮え立  
つて皮膚に穴をあげたらどうぞ、と初き上る  
だらう。教授方の貴重な講義を聞きながら  
我等は今人間の焼肉でも出来やしないか  
心配でたまらぬわけである。

○だが、もうすぐ夏期休暇が来る。さうだ、  
眼の前には暑さがつてゐる。徒らにあせつて  
睡覺の姿さんによられてはなるまい。

○夏期休暇の或る唯時間の間のみでも涼し  
さを提供する、否、唯暑さを忘れさせること  
に此の「丘人」の一部が役立つならば、今我等が、  
隣のカフェーから聞えるピアノの音に、口の  
隅を殊更愛つても、この編纂雑誌を奪きつ  
ゝ感ずる暑さも嫌しさの爲に陰に減せられる  
ことにならうといふものだ。(この時迄な文章  
は益君を譽くすかとも知れぬ、がわからな  
さして若し諸君が、それは暇つぶしにしか  
なるまいが、努力でもすればその間だけでも  
暑さを忘れる足しになるといふものだ。)

○夏期休暇の間には案外勉強が出来ぬものら  
しい。切角計劃を立てても、せいぜい二週間  
もたてば、くづれてしまふ。日記を書きかけ  
ても、何月何日晴愉快といふのが兵卒のやう  
に、電柱のやうに、行列する位のことか關の  
山だらうといふものだ。

○だが、今年は何も今年に限らぬ、こゝだが、  
去年の夏期休暇初めに田嶋教授のいはれは、こ  
こを思ひ出して、學生時代にのみ出来ること  
なして愉快な思ひ出を作りたいものだ。

○もし夏期休暇の第一日に立てた計劃どほり  
勉強なり何なりが出来たら、我等本懐の上  
なしといふことになつて、しかも恐らくは、  
自ら英雄を以て氣取ることが出来よう。

○さはいへ、思ふに、夏期休暇に計劃を立て  
ぬ人も賢いといへるだらう。何とせば彼は、  
僕は閉き直つてゐるわけではないが、敢てい  
ふ、休暇の終りに計劃の破れてゐるを見て自

らを薄志弱行の徒の中に數へ込む不愉快なま  
けることが出来るだらうからである。

○さて、夏期休暇の間には諸君色々短歌俳  
句詩感想等を得られるだらう、又各部の諸君  
も大に奮闘されるだらう。我等編纂部委員は  
諸君からそれらを得、又各部の部報を貰つて  
九月には光彩陸離たる丘人を發行したいと  
こそ思ふのだ。が口惜しい残念なことは頁數  
が何分にも少いことだ。願はくは、丘人の爲  
に投書されんことを望まざるを得ぬ。

○この丘人が諸君の手許に渡る時は二箇月に  
亘る長い休暇になる日である。諸君の眼に紺  
碧に澄み切つた海と白い砂と濃緑の松の姿と  
が目に浮ぶであらう。さては深山の静寂と傳  
ふ深流のひびきに耳をすまされるであらう。  
さうした希望を抱き得る人間は幸福である  
實に我々は幸福である。

本誌も例によつて實情な編纂振りで諸君に  
對して甚だすまなく思つてゐる。山崎君の御  
忠告等に対しては何のお答もない次第である  
しかし、編纂子は記事の製造者であり得ない  
否、さうでないことを「丘人」の發達の爲に望  
む者である。編纂子は諸君のよき原稿を期待  
する。これは何時も通りである。山崎君など  
も、殊に編纂部の一員たる以上は出で、一臂  
の力を貸して下さる方が編纂子にとつてどの  
位有難いか分らない。

なを本誌は御覽の如く編纂餘言の欄に殆ん  
ど二頁もの除白を生じた。實に赤面に堪へな  
い。何分委員は新しい「丘人」の形式に不馴  
篤である。切に諸君の御了解を乞ふ次第であ  
る。次號からは表題やその他の體裁を多少改善  
したい希望を持つてゐる。實現の日を待つて  
ゐて貰ひたい。

それから先號でこの丘人のナンバーを以前  
の學友會報のそれを、そのまゝ受け継ぐやう  
に配し又その通りにしたが、丸谷教授の御意

見に従つて、本號から、丘人は丘人として新  
しい號數を追ふこととした。新しいものゝ創  
生にはその方がよい相應しいことであつたの  
だ。そして、従前の號數は、學友會報へ受け継  
ぐ事にした。この點も御承知置き願ひたい。

○忘れない中に書いて置くが、本誌に當然記  
載さるべき嘉久二君の原稿をオミットしたこ  
とを非常に遺憾に思ふ。記して同君にお詫び  
します。

○この夏休みには諸君に様々な計畫があるこ  
とも思ふ。従つて又面白い経験の數々をお持  
ちになるだらう。どうかそれを一文に綴るだ  
けの勞を惜み給ふな。次號の「丘人」はさうし  
た記事で一杯にしたい。今から堅くお願ひす  
る次第である。

○今七時を打つた。編纂子は全身汗みづくで  
これを書いてゐる。旋風機は生ぬる風を送  
る。九十何度である。  
編纂子は今一仕事を終へた喜びを以て煙草  
に火をつけるのである。  
二箇月に亘る休暇の間、すべての丘人に幸  
福と健康を與へ給へ。編纂子は切に祈りつ  
ゝ無難な編纂餘言の筆を擱く。(勇二追記)  
(一九二二・七・九)

### 豫告

九月號(第三號)原稿締切日並  
に發行日等につきましては、九月  
上旬控室に發表す。

### 編纂部

大正十三年七月十日印刷 (非賣品)  
大正十三年七月十一日發行

編纂部 窪田 安次郎  
印刷人 辻 左武郎  
發行所 神戸高等商業學校友會